

## 編集後記

今回お届けする『大衆文化』第二十三号には、大衆文化を様々な角度から捉え直した論文四本が掲載されています。

石川巧氏は「艶めかしき怪談——江戸川乱歩「人でなしの恋」論（上）」の中で、悲劇の主人公でもある未亡人の「私」の語り方に着目し、狂気や恐怖、情欲などの演出がどのようになされているのかについて分析しています。特に恋敵である人形の呼称の変化などは、興味深い発見のひとつかと思われまます。

小松史生子氏の「江戸川乱歩「孤島の鬼」の着想を巡って」では、作品の設定時期と重なる大正当時の様子や各資料とを比較して、モデルとなった和歌山県の港の特定や舞台設定の秘密、主要人物である簗浦金之助と諸戸道雄の名前の由来などが解き明かされます。細い糸口からスルスルと結論が導き出されており、あたかも一編の探偵小説を読んでいるかのような味わいのある一本となっています。

松本和也氏の「岸田國土「かへらじと」を読む——移動演劇の作劇術」は、「戦争志願奨励劇」の側面を持つ一方で、軍人精神への冒涇だと批判もされていた「かへらじと」の再評価を試みた論考になります。上演された当時の評価

を丁寧洗い出し、登場人物の内面描写を分析した上で、観者に解釈を委ねた「空所の領域」があることこそが、複雑な評価につながる、また戦時下の友情を描き、魅力ある作品となったと論じられています。

村松まりあ氏の「[Pink]から[pink]へ——岡崎京子「Pink」論」では、初出作品から単行本作品への変化が、初出掲載雑誌『NEWパンチザウルス』や章タイトルの分析を通して行われています。安易なジェンダー論に陥りがちなテーマですが、若い男性読者を対象とした雑誌と、より広範な読者を対象とした単行本という掲載媒体の分析を通じて、堅実な作品研究となっています。

新型コロナ感染症の流行は未だ収まる気配がなく、旧江戸川乱歩邸の一般公開も長らくお休みしていましたが、大学の指針に従い、感染対策を講じた上で一部施設を再開いたしました。散歩や買い物ついでに足を伸ばして往事の雰囲気を楽しんでいただくような、身近な施設でありたいと願っておりますが、コロナ対策のため開館日や開館時間、ご覧いただく場所などが通常とは異なり、また見学に当たっては当面、予約制といたしました。ご不便をおかけいたしますが、ご来館の際は当センターのホームページや掲示板などにて詳細をご確認の上、お越しくださいますようお願いいたします。